

## コミュニティーレベルの幸福度に関するコメント

千葉大学大学社会科学研究院教授

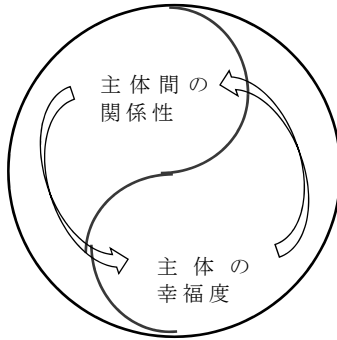
石戸 光

ブリレルテンスキー教授の講演は、コミュニティーレベルの幸福度について、個人の幸福度との関係性の中で考察した新規な研究内容のようである。筆者はAPEC（アジア太平洋経済協力会議）やその派生としてのTPP（環太平洋パートナーシップ協定）など、政治経済的な地域統合を研究対象としているが、貿易・投資の自由化を通じたコミュニティーレベルの「厚生」すなわち「幸福度」の上昇が地域統合においても究極的に志向されているため、同教授の注目点に関心を抱いている。社会構成員間の関係性（対立、依存、消長、転化等）および主体のあり方（国是や世論の分布）自体が大きく変化する状況下では、「関係性が主体の幸福度に影響を与え、その逆（主体の幸福度から関係性への因果連鎖）もまた真」という図1のような捉え方<sup>1</sup>が現実的である。また図2に示されるように、ミクロ的（個人レベル）・メソ的（コミュニティーレベル）・マクロ的（さらに広い国家・グローバルなレベル）という階層的な関係性の相互依存的「場」を重視した分析形式が幸福度の研究においても重要となるものと考えられる。

ブリレルテンスキー教授の講演では、幸福度についての統計的な分析結果が示されており、今後は客観指標と主観指標の比較衡量により幸福度の水準を具体的に比較検討していくことが重要と思われる。筆者（石戸）の身近な観点からは、先日サマースクール受講のために千葉大学へ来校した中国からの学生たち42人を対象に、小林正弥教授が作成のアンケート項目に従ってごく簡単な

<sup>1</sup> 同図は中国の陰陽思想において用いられるものと類似している。このことの指摘は千葉大学特任研究員の田代佑妃氏による。

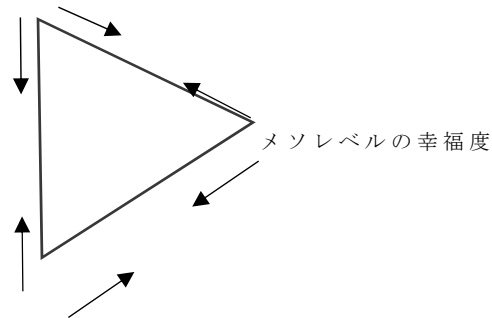
図1 関係性と主体の幸福度の相互作用性



注：矢印は因果的な方向を示している。

図2 マクロ・メソ・ミクロ間の相互作用的な幸福度の「場」

マクロレベルの幸福度



ミクロレベルの幸福度

注：矢印は因果的な方向を示している。

調査を実施した。

表1および図3に回答結果集計し、コンジョイント分析（全体の幸福度に個々の項目がどの程度寄与しているかを示す統計的分析）を行った結果を示す。

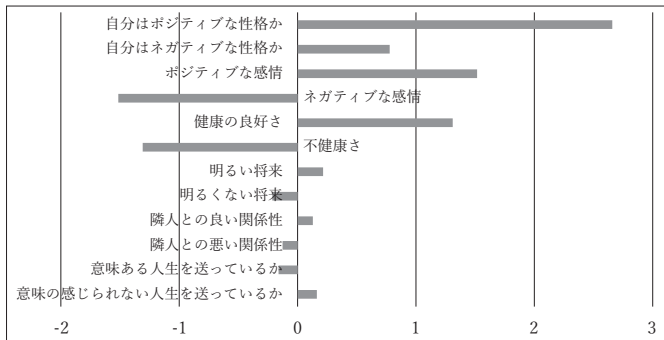
表1 幸福度についてのアンケート調査のコンジョイント分析結果

幸福度に関連するアンケートの項目立て a	寄与度
意味の感じられない人生を送っているか	0.1618
意味ある人生を送っているか	-0.1618
隣人との悪い関係性	-0.1284
隣人との良い関係性	0.128397
明るくない将来	-0.21497
明るい将来	0.214966
不健康さ	-1.31212
健康の良好さ	1.312117
ネガティブな感情	-1.5191
ポジティブな感情	1.519099
自分はネガティブな性格か	0.778835
自分はポジティブな性格か	2.663505

注：a 小林正弥教授作成の詳細な項目を集約したもの。

出所：小林正弥教授作成のアンケート調査票をもとに田代佑紀氏作成。

図3 幸福度についてのアンケート調査のコンジョイント分析結果



出所：表1をもとに作成。

上記に示す中国の都市部における大学で学ぶ学生たちへの予備的なアンケート調査においては、自分自身がポジティブな性格か、あるいはポジティブな感情を持ちやすいか、個人としての要素が幸福度に大きく寄与しているように思われる。その反面、「隣人との良い関係性」は小さいながらもプラスに寄与し、「隣人との悪い関係性」はやはり小さいながらもマイナスに寄与している様子が分かる。中国人（の学生）の幸福度に関して一般的なことは言えないが、上記結果だけについては、幸福度として個人主義的な要素の寄与度が大きいよう

に思われる。

一方、国民総幸福量（Gross National Happiness: GNH）で有名な「幸福の国」ブータンにおいては、杉野・田代両氏の論稿に示されるように、GNHの4つの柱（社会経済的發展・環境保護・文化の保護と促進・良き統治）に関わる経済システム、環境、文化、統治者（国王）およびコミュニティーレベルの構成員（家族・友人）、のすべてが互いにポジティブな関係性を保つことが、ブータンにとっての幸福度となっている。

経済学における功利主義は個人主義的で客観的指標を重視した厚生（幸福度）を重視しているが、ブータンではコミュニティーレベルでの主観的幸福をGNHとして捉えており、このことの対比は重要である。社会事業家であった賀川豊彦は著書『友愛の政治経済学』において、社会の厚生水準を図る基準として、「主観経済」の重要性を提起し、7つの価値（生命、労働、変化、成長、選択、秩序、目的）を提示しているが、これらの価値はまさに個人レベルの主観によって大きく影響され、またその個人の置かれた社会によっても大きな差異が生まれてくる、「主観的指標」に属する項目であるといえよう（このうち「生命」はいずれの社会においても是認しうる価値であると信じたいが）。

また筆者（石戸）がかつて勤務した国連開発計画（United Nations Development Programme: UNDP）は「人間開発指数（Human Development Index: HDI）」として人間を主体とした開発度を寿命、教育、所得の3分野を総合した1点満点の指数として算出・公表しているが、そこにおいてブータンは「幸福」の国であるにも関わらず、低い水準の得点となっている。（例えば2016年では、同国の総合的なHDIの値は0.607であり、世界ランキングは132位であった（日本はHDIの値が0.903で、17位であった）。人間開発指数と幸福度とは大きな乖離が存在しているといえよう。

ブリレルテンスキー教授の手がけているコミュニティーレベルの幸福度研究は非常に重要であると同時に緒についたばかりであり、今後さらに社会レベルの幸福度についての客観的、主観的な指標の併用による比較研究が望まれる。

（いしど ひかり）